



Informatica® Cloud Data Integration
October 2024

基本操作

Informatica Cloud Data Integration 基本操作
October 2024

© 著作権 Informatica LLC 2016, 2025

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複写、写真複写、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

Informatica、Informatica Cloud、Informatica Intelligent Cloud Services、PowerCenter、PowerExchange、および Informatica ロゴは、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web (<https://www.informatica.com/trademarks.html>) にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、infa_documentation@informatica.com までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとしします。

発行日: 2025-01-09

目次

序文	5
Informatica のリソース.....	5
Informatica マニュアル.....	5
Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト.....	5
Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティ.....	5
Informatica Intelligent Cloud Services マーケットプレイス.....	6
データ統合のコネクタのドキュメント.....	6
Informatica ナレッジベース.....	6
Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center.....	6
Informatica グローバルカスタマサポート.....	6
第 1 章 : Informatica Cloud データ統合の基本操作	7
第 2 章 : システム要件	8
Internet Explorer 11 での CORS の有効化.....	8
第 3 章 : ランタイム環境設定	13
Hosted Agent.....	14
クラウド環境でのランタイム環境の設定.....	16
AWS でのインストール.....	16
Google Cloud のインストールの使用.....	19
Microsoft Azure でのインストール.....	21
Windows でのインストール.....	23
Windows での Secure Agent の要件.....	23
Windows での Secure Agent のダウンロードおよびインストール.....	24
Windows でのプロキシ設定の構成.....	26
Windows Secure Agent サービスのログインの設定.....	26
Linux でのインストール.....	27
Linux での Secure Agent の要件.....	27
Linux での Secure Agent のダウンロードおよびインストール.....	29
Linux でのプロキシ設定.....	30
第 4 章 : 接続設定	32
接続の設定.....	32
オブジェクト検索と選択.....	33
第 5 章 : プロジェクトの設定	35
プロジェクトとプロジェクトフォルダの作成.....	35
アセットの作成.....	36

第 6 章 : ソース管理の有効化	37
リポジトリアクセスの設定.	37
第 7 章 : ユーザープロファイルの編集	38
第 8 章 : ユーザー設定の編集	39
第 9 章 : 組織へのユーザーの招待	40
第 10 章 : プライマリクラウドデータウェアハウスのセットアップ	41
プライマリクラウドデータウェアハウスの設定.	41
プライマリクラウドデータウェアハウスの変更または選択解除.	42
第 11 章 : 別の組織への切り替え	43
索引	44

序文

Informatica Cloud® Data Integration の使用を開始する方法については、「基本操作」を参照してください。「基本操作」では、ランタイム環境を構成し、Data Integration をシステムに接続してプロジェクトを開始する方法を説明します。

Informatica のリソース

Informatica は、Informatica Network やその他のオンラインポータルを通じてさまざまな製品リソースを提供しています。リソースを使用して Informatica 製品とソリューションを最大限に活用し、その他の Informatica ユーザーや各分野の専門家から知見を得ることができます。

Informatica マニュアル

Informatica マニュアルポータルでは、最新および最近の製品リリースに関するドキュメントの膨大なライブラリを参照できます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

製品マニュアルに関する質問、コメント、ご意見については、Informatica マニュアルチーム (infa_documentation@informatica.com) までご連絡ください。

Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト

Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト (<http://www.informatica.com/cloud>) にアクセスできます。このサイトには、Informatica Cloud 統合サービスに関する情報が含まれます。

Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティ

Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティを使用して、技術的な問題について議論し、解決します。また、技術的なヒント、マニュアルの更新情報、FAQ（よくある質問）への答えを得ることもできます。

次の Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティにアクセスします。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/products/cloud-integration>

開発者は、次の Cloud 開発者コミュニティで詳細情報を確認したり、ヒントを共有したりできます。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/products/cloud-integration/cloud-developers>

Informatica Intelligent Cloud Services マーケットプレイス

Informatica マーケットプレイスにアクセスすると、データ統合コネクタ、テンプレート、およびマップレットを試用したり購入したりできます。

<https://marketplace.informatica.com/>

データ統合のコネクタのドキュメント

データ統合のコネクタのドキュメントには、マニュアルポータルからアクセスできます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

Informatica ナレッジベース

Informatica ナレッジベースを使用して、ハウツー記事、ベストプラクティス、よくある質問に対する回答など、製品リソースを見つけることができます。

ナレッジベースを検索するには、<https://search.informatica.com> にアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム (KB_Feedback@informatica.com) です。

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center は、Informatica のセキュリティポリシーおよびリアルタイムでのシステムの可用性について情報を提供します。

Trust Center (<https://www.informatica.com/trust-center.html>) にアクセスします。

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center にサブスクライブして、アップグレード、メンテナンス、およびインシデントの通知を受信します。[Informatica Intelligent Cloud Services Status](#) ページには、すべての Informatica Cloud 製品の実稼働ステータスが表示されます。メンテナンスの更新はすべてこのページに送信され、停止中は最新の情報が表示されます。更新と停止の通知がされるようにするには、Informatica Intelligent Cloud Services の 1 つのコンポーネントまたはすべてのコンポーネントについて更新の受信をサブスクライブします。すべてのコンポーネントにサブスクライブするのが、更新を逃さないようにするための最良の方法です。

サブスクライブするには、[Informatica Intelligent Cloud Services Status](#) ページで **【サブスクライブして更新】** をクリックします。電子メール、SMS テキストメッセージ、Webhook、RSS フィード、またはこの 4 つの任意に組み合わせとして送信される通知を受信するという選択ができます。

Informatica グローバルカスタマサポート

グローバルサポートセンターには、Informatica Network または電話でお問い合わせください。

Informatica Network でオンラインサポートリソースを検索するには、Informatica Intelligent Cloud Services のヘルプメニューで **【サポートにお問い合わせください】** をクリックして、**Cloud Support** ページに移動します。**Cloud Support** ページには、システムステータス情報とコミュニティディスカッションが記載されています。追加のリソースを検索する場合や電子メールで Informatica グローバルカスタマサポートに問い合わせる場合は、Informatica Network にログインし、**【サポートが必要な場合】** をクリックしてください。

Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica の Web サイト <https://www.informatica.com/services-and-training/support-services/contact-us.html> に掲載されていません。

第 1 章

Informatica Cloud データ統合の 基本操作

データ統合プロジェクトは、わずかな手順で作成できます。

手順 1。システム要件の確認

Informatica Intelligent Cloud Services プロジェクトの設計時に互換性のあるブラウザを使用していることを確認し、データ統合がサポートするオペレーティングシステム、データベース、およびその他のシステムについて、Informatica Intelligent Cloud Services の製品可用性マトリックスを確認してください。

手順 2。ランタイム環境の設定

ランタイム環境は、タスクを実行するための実行プラットフォームです。ランタイム環境は、1 つ以上の Secure Agent で構成されます。Secure Agent は、タスクを実行し、組織と Informatica Intelligent Cloud Services 間でのファイアウォールを越えた安全な通信を可能にする軽量プログラムです。組織内のユーザーがタスクを実行できるように、各組織に少なくとも 1 つのランタイム環境が必要です。

手順 3。接続の作成

データ統合を使用してデータ統合タスクを実行する前に、接続を作成する必要があります。接続を設定するときは、データ統合とソースオブジェクトとターゲットオブジェクトとの間でのデータ交換を可能にするコネクタを指定します。例えば、Salesforce データを使用するタスクを作成する場合は、Salesforce 接続を作成します。Salesforce 接続は Salesforce コネクタを使用して、Salesforce とデータ統合との間のデータ交換を可能にします。

手順 4。プロジェクトの作成

マッピング、タスク、タスクフローなどのアセットを含むフォルダ内のデータ統合プロジェクトを整理します。プロジェクトフォルダと、プロジェクトに必要なアセットを含むフォルダを作成します。

フォルダを設定したら、プロジェクトアセットを作成します。アセットには次のオブジェクトが含まれます。

- マッピング
- タスク
- タスクフロー
- ビジネスサービス、マップレット、および階層スキーマなどのコンポーネント

手順 5。ソース管理リポジトリへのプロジェクトの追加（オプション）

所属する組織がソース管理に対応しており、ソース管理リポジトリへの読み書きアクセス権を組織が持っている場合は、プロジェクトをリポジトリに追加できます。

プロジェクトを追加する前に、組織の管理者は、組織とソース管理リポジトリとの間のリンクを設定する必要があります。また、Informatica Intelligent Cloud Services でソース管理のユーザー資格情報を指定する必要があります。

第 2 章

システム要件

システム要件の詳細については、Informatica Intelligent Cloud Services の製品可用性マトリックス (PAM) を参照してください。

PAM には、製品リリースでサポートされるブラウザ、オペレーティングシステム、データベースのバージョン、およびその他のデータソースやターゲットが記載されています。PAM は、Informatica Network (<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices/>) でご確認いただけます。

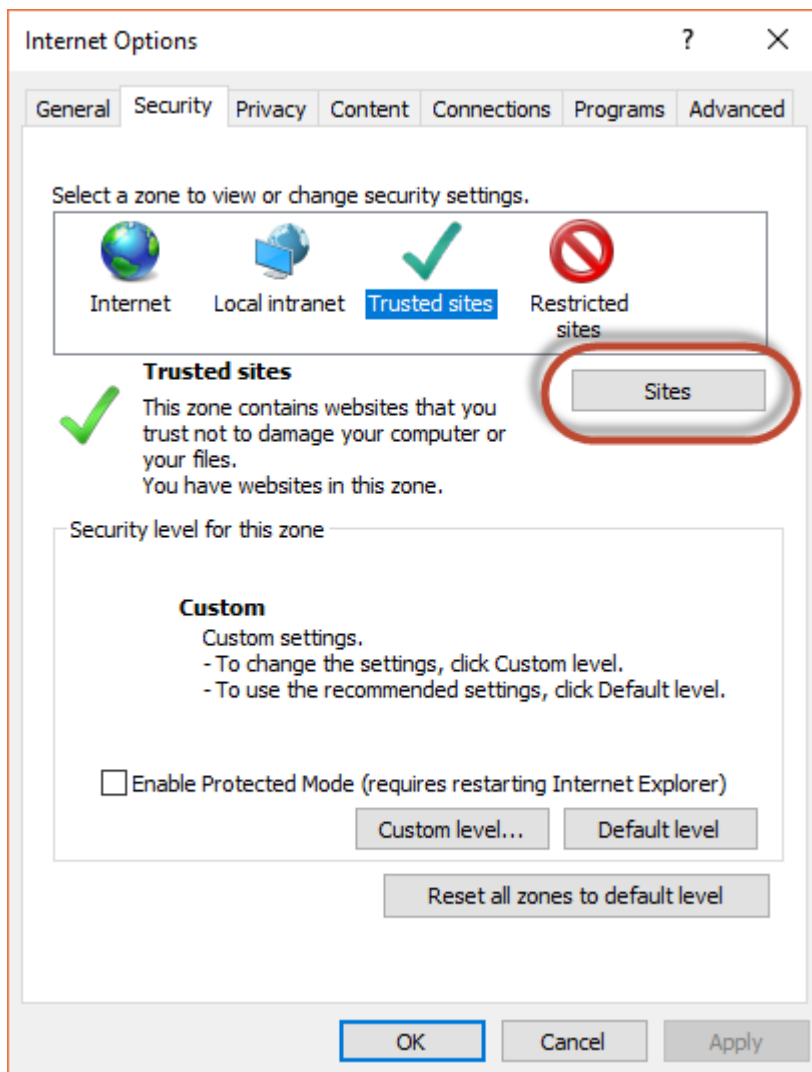
Internet Explorer 11 での CORS の有効化

Informatica Intelligent Cloud Services では、Internet Explorer 11 でクロスオリジンサポート (CORS) を有効にする必要があります。Internet Explorer 11 のデフォルトでは、CORS は有効になっていません。

注: 一部の会社のセキュリティポリシーでは、Web ブラウザーで CORS を有効にすることが制限されています。これらの設定を更新する前に、会社または IT 部門に CORS 設定を変更してもよいか確認してください。

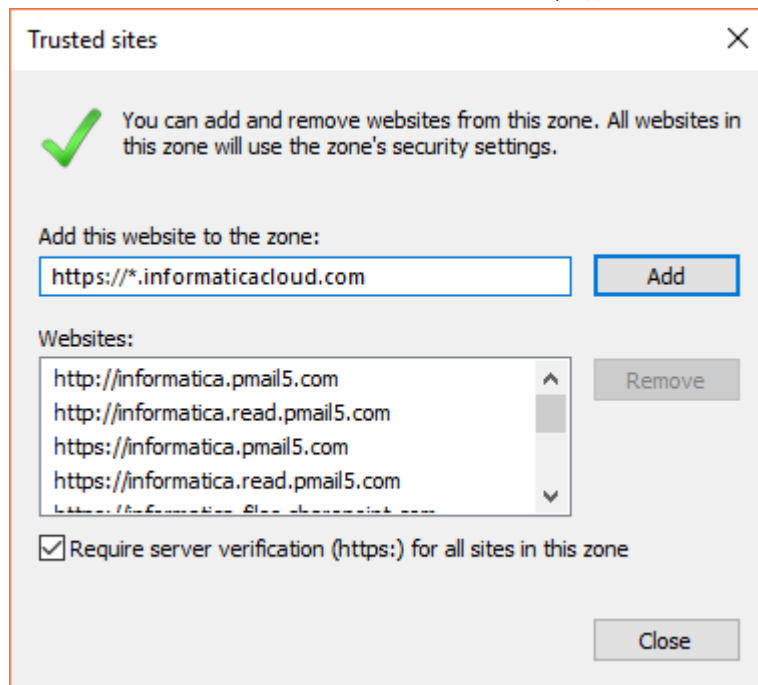
1. Internet Explorer 11 を開きます。
2. **【ツール】** メニューで、**【インターネットオプション】** を選択します。

3. 次の図に示すように、[セキュリティ] タブで [信頼済みサイト] をクリックし、[サイト] をクリックします。



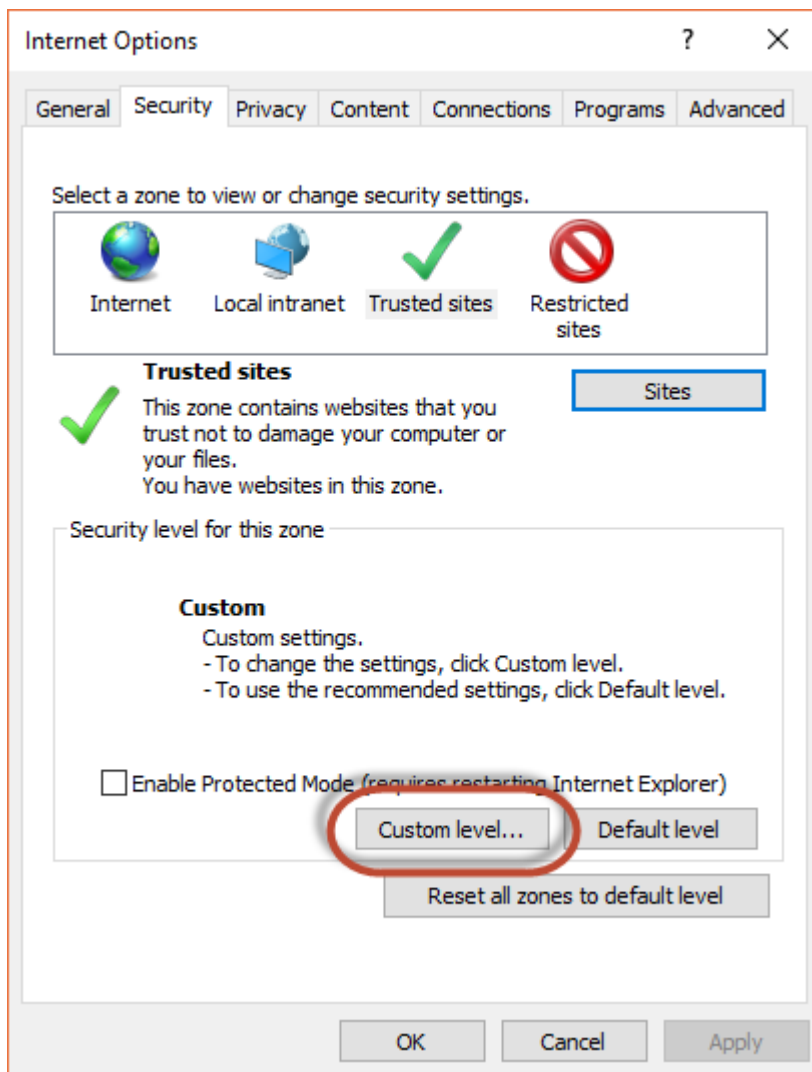
4. [信頼済みサイト] ダイアログボックスで、Informatica Intelligent Cloud Services ドメインをゾーンに追加し、[追加] をクリックします。

例えば、次の図は、ゾーンに追加されたドメイン `https://*.informaticacloud.com` を示しています。

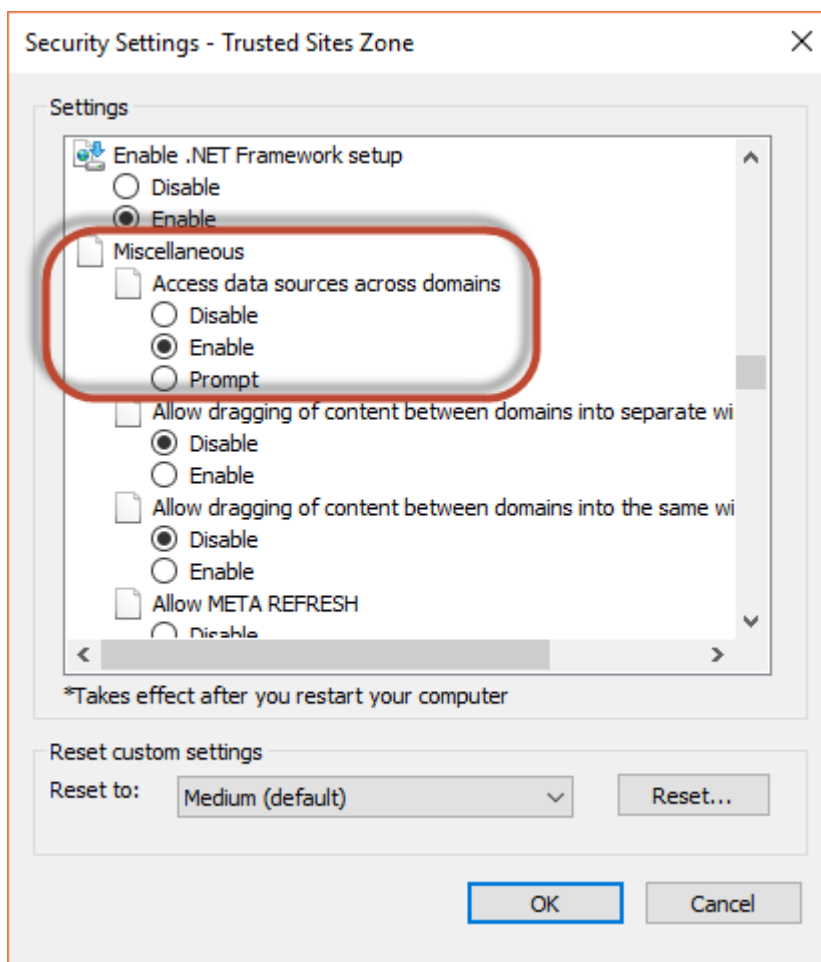


5. 【閉じる】をクリックします。

6. 次の図に示すように、[セキュリティ] タブの [このゾーンのセキュリティのレベル] 領域で、[レベルのカスタマイズ] をクリックします。



7. 次の図に示すように、[セキュリティ設定 - 信頼されたゾーン] ダイアログボックスで、[その他] の見出しが表示されるまで下にスクロールし、[ドメイン間でのデータソースのアクセス] を有効にします。



8. [OK] をクリックします。
9. メッセージが表示された場合は、ゾーンの設定を変更することを確認します。
10. [OK] をクリックします。
11. Internet Explorer を再起動し、Informatica Intelligent Cloud Services を開き直します。

第 3 章

ランタイム環境設定

ランタイム環境は、タスクを実行するための実行プラットフォームです。組織内のユーザーがタスクを実行できるように、各組織に少なくとも 1 つのランタイム環境が必要です。

ランタイム環境は、1 つ以上の Secure Agent で構成されます。Secure Agent は、タスクを実行し、組織と Informatica Intelligent Cloud Services 間でのファイアウォールを越えた安全な通信を可能にする軽量プログラムです。

ランタイム環境は、次の方法で作成およびアクセスすることができます。

Informatica Cloud ホステッドエージェントを使用します。

これは最も簡単かつ迅速な方法です。ホステッドエージェントは、データ統合のすべてのインストールに含まれています。

SaaS 環境でデータにアクセスする場合は、Informatica Cloud Hosted Agent を使用できます。ホステッドエージェントは、Informatica Intelligent Cloud Services ホスティング機能内で実行されるため、インストール作業が必要になることはありません。

ホステッドエージェントは、特定のコネクタを使用するマッピングタスク、同期タスク、およびレプリケーションタスクを実行することができます。使用するコネクタが Hosted Agent をサポートしているかどうかを確認するには、関連するコネクタのヘルプを参照してください。

クラウド上のランタイム環境を設定します。

これは 2 番目に簡単な方法です。インストールウィザードによって、AWS、Google Cloud、または Microsoft Azure で Secure Agent をセットアップおよび設定するためのすべての作業をバックグラウンドで行います。

注: クラウド上にランタイム環境を設定すると、クラウドプラットフォーム上に仮想マシンが作成され、追加のコストが発生する可能性があります。

Secure Agent をダウンロードしてインストールします。

オンプレミスのデータにアクセスする必要がある場合、またはホステッドエージェントを使用せずに SaaS データにアクセスする場合は、Secure Agent を手動でダウンロードしてインストールします。

次のいずれかのタスクを実行する必要がある場合は、ランタイム環境を手動でダウンロードしてインストールします。

- Windows でエージェントを実行する。
- エージェントをローカルマシンにインストールするか、AWS、Google Cloud、Microsoft Azure 以外のクラウドプラットフォーム上の VM にインストールする。
- ファイアウォールの内部にあるデータソースにアクセスする。
- 他のランタイム環境タイプでは実行できないタスクを実行する。例えば、データ取り込みおよびレプリケーションタスクは、ローカルの Secure Agent 上で実行する必要があります。

1つの Secure Agent を各物理マシンまたは仮想マシンにインストールできます。インストールする各エージェントは、デフォルトで独自のグループに追加されます。複数のエージェントをグループに追加してワークロードのバランスを調整し、スケーラビリティを向上させることができます。

サーバーレスランタイム環境を設定します。

サーバーレスランタイム環境は、Secure Agent や Secure Agent グループのダウンロード、インストール、設定、管理が必要ない高度なサーバーレスデプロイメントソリューションです。

Hosted Agent のマルチテナントモデルと比較して、サーバーレスランタイム環境は、タスクを実行するための仮想マシンリソースを専用サーバーに提供する分離されたシングルテナントモデルを使用します。サーバーレスランタイム環境は、負荷の規模に合わせて自動スケールしますが、データはクラウド環境内に残ります。

サーバーレスランタイム環境の設定の詳細については、Administrator のヘルプの「ランタイム環境」を参照してください。

Hosted Agent

Hosted Agent は、特定のコネクタを使用する同期、マッピング、レプリケーションタスクを実行できます。

Informatica Intelligent Cloud Services では Hosted Agent のランタイム環境が管理されるため、Hosted Agent を追加、削除、または設定することはできません。

Hosted Agent は、次のコネクタを使用する同期、マッピング、レプリケーションタスクを実行できます。

- Amazon Athena コネクタ
- Amazon Aurora コネクタ
- Amazon Redshift コネクタ
- Amazon Redshift V2 コネクタ
- Amazon S3 コネクタ
- Amazon S3 V2 コネクタ
- Box コネクタ
- Box Oauth コネクタ
- Cloud 統合ハブ
- Concur V2 コネクタ
- Coupa コネクタ
- Coupa V2 コネクタ
- Cvent コネクタ
- Databricks Delta コネクタ
- DB2 Warehouse on Cloud コネクタ
- Eloqua Bulk API コネクタ
- Google Analytics コネクタ
- Google Big Query コネクタ
- Google Big Query V2 コネクタ

- Google Cloud Storage コネクタ
- Google Cloud Storage V2 コネクタ
- JIRA コネクタ
- Marketo V3 コネクタ
- Microsoft Azure Blob Storage V2 コネクタ
- Microsoft Azure Blob Storage V3 コネクタ
- Microsoft Azure Cosmos DB SQL API コネクタ
- Microsoft Azure Data Lake Storage Gen1 V2 コネクタ
- Microsoft Azure Data Lake Storage Gen1 V3 コネクタ
- Microsoft Azure Data Lake Storage Gen2 コネクタ
- Microsoft Azure SQL Data Warehouse V2 コネクタ
- Microsoft Azure SQL Data Warehouse V3 コネクタ
- Microsoft Azure Synapse SQL コネクタ
- Microsoft CDM Folders V2 コネクタ
- Microsoft Dynamics 365 for Operations コネクタ
- Microsoft Dynamics 365 for Sales コネクタ
- Microsoft Fabric Data Warehouse コネクタ
- Microsoft Fabric Lakehouse コネクタ
- Microsoft Fabric OneLake コネクタ
- Microsoft SQL Server コネクタ
- MySQL コネクタ
- NetSuite コネクタ
- OData コネクタ
- Oracle コネクタ
- PostgreSQL コネクタ
- REST V2 コネクタ
- Salesforce コネクタ
- Salesforce Marketing Cloud コネクタ
- Salesforce Oauth コネクタ
- ServiceNow コネクタ
- Snowflake Cloud Data Warehouse V2 コネクタ
- SuccessFactors ODATA コネクタ
- UltiPro コネクタ
- Workday V2 コネクタ
- Xactly コネクタ
- Zendesk V2 コネクタ
- Zuora AQuA コネクタ

注: Hosted Agent のサポートはコネクタ固有です。詳細については、関連するコネクタのヘルプを参照してください。

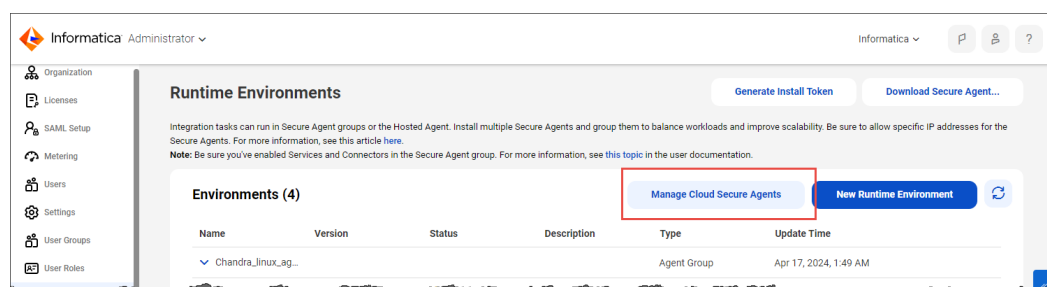
クラウド環境でのランタイム環境の設定

Secure Agent は、AWS、Google Cloud、または Microsoft Azure にインストールして実行できます。

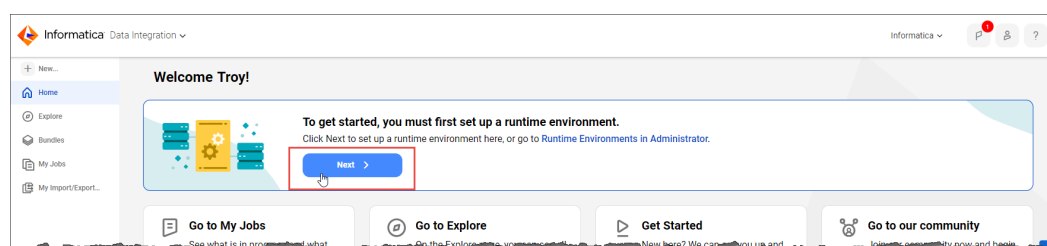
Secure Agent は、クラウド環境に基づいて次の方法でインストールします。

- AWS を選択した場合は、インストールを続行するために AWS Marketplace にリダイレクトされます。
- Google Cloud を選択した場合は、Google の資格情報を使用してログインし、Secure Agent の設定の詳細を入力します。
- Microsoft Azure を選択した場合は、Azure の資格情報を使用してログインし、Secure Agent の設定の詳細を入力します。

管理者の **[ランタイム環境]** ページで、クラウド環境に Secure Agent をインストールすることができます。次の画像に示すように、**[Cloud Secure Agents の管理]** をクリックしてインストーラを開きます。



組織が統合された **[ホーム]** ページを使用しており、組織にランタイム環境がない場合は、次の画像に示すように、**[開始するには最初にランタイム環境を設定する必要があります]** パネルで **[次へ]** をクリックして、クラウド環境に Secure Agent をインストールすることもできます。



AWS でのインストール

の Secure Agent インストーラを使用して、Amazon Web Services (AWS) にランタイム環境を作成できます。作成するランタイム環境は、1 つの Secure Agent を含む Secure Agent グループです。

AWS にランタイム環境を作成する場合は、Secure Agent がデプロイされる新しいスタックを作成します。スタックは、新規または既存の Virtual Private Cloud (VPC) に作成できます。インストーラにより、VPC 内に Amazon Elastic Compute Cloud (EC2) インスタンスが作成されます。

ランタイム環境を作成するには、次のリソースタイプの作成、変更、削除特権を含む AWS のサブスクリプションが必要です。

- EC2 インスタンス
- エラスティック IP アドレス
- エラスティックネットワークインタフェース
- インターネットゲートウェイ
- ルートテーブル
- セキュリティグループ
- サブネット
- VPC

また、マシンイメージの読み取りと起動の権限が必要です。

1. [Administrator] で、[ランタイム環境] を選択します。
2. [ランタイム環境] ページで、[Cloud Secure Agent の管理] をクリックします。
3. [新しい Cloud Secure Agent] をクリックします。
4. [Amazon Web Services] を選択します。
5. [次へ] をクリックします。
6. [環境設定] ページで、インストールトークンをコピーします。
インストールトークンの有効期限は 24 時間で、再利用することはできません。
7. ランタイム環境を既存の VPC に作成するか、新しい VPC に作成するかを選択します。
8. [AWS での設定を続行] をクリックします。
AWS の [サインイン] 画面が新しいブラウザタブで開きます。
9. AWS アカウントにサインインします。
[スタックのクイック作成] ページが開きます。
10. [スタック名] 領域で、スタック名を入力します。
11. [パラメータ] 領域の [ネットワーク設定] で、既存の VPC を使用しているか新しい VPC を使用しているかに基づいて次のプロパティを設定します。
 - 既存の VPC の場合は、次のプロパティを設定します。

プロパティ	値
VPC ID	Secure Agent をデプロイする VPC の ID を選択します。
サブネット ID	VPC 内のサブネットを入力または選択します。
許可されたリモートアクセス CIDR	Secure Agent をインストールできる IP アドレスを指定する CIDR ブロックを入力します。 CIDR (Classless Inter-Domain Routing) は、IP アドレスを割り当てるための方法です。ネットワークルールで Secure Agent へのリモートアクセスを許可するように設定します。アドレスの"/x"の部分により、サブネットで使用可能な IP アドレスの数が決定されます (例:108.124.81.10/32)。

- 新しい VPC の場合は、次のプロパティを設定します。

プロパティ	値
可用性ゾーン	現在のリージョンの可用性ゾーンを選択します。
VPC CIDR	VPC を作成する IP アドレスを指定する CIDR ブロックを入力します。
サブネット CIDR	選択した可用性ゾーン内のサブネットの IP アドレスを指定する CIDR ブロックを入力します。
許可されたリモートアクセス CIDR	Secure Agent をインストールできる IP アドレスを指定する CIDR ブロックを入力します。

12. **[Amazon EC2 の設定]** で、次のプロパティを設定します。

プロパティ	値
キーペア名	既存の EC2 キーペアの名前を入力して、EC2 インスタンスへの外部アクセスを有効にします。サーバーへの SSH アクセスには、対応するキーペアファイルが必要です。
インスタンスタイプ	EC2 インスタンスのインスタンスタイプを選択するか、デフォルトのインスタンスタイプを受け入れます。 デフォルトは m5.xlarge です。
エラスティック IP アドレスリングの有効化	エラスティック IP アドレスを EC2 インスタンスに割り当てるか、デフォルトのアドレスを受け入れるかを選択します。 デフォルトは [いいえ] です。

13. **[Informatica Intelligent Data Management Cloud (IDMC) アカウントの詳細]** で、次のプロパティを設定します。

プロパティ	値
IDMC POD マスタ URL	IDMC POD マスタ URL のデフォルト値を受け入れます。これは、Informatica Intelligent Cloud Services へのアクセスに使用する URL です。 警告: この URL を変更すると、スタックのデプロイメントが失敗する可能性があります。
IDMC ユーザー名	Informatica Intelligent Cloud Services ユーザー名を入力します。
IDMC ユーザートークン	コピーしたインストールトークンを貼り付けます。 インストールトークンをコピーし忘れた場合は、Informatica Intelligent Cloud Services に切り替えて新しいトークンを生成できます。
Secure Agent グループ名	Secure Agent グループ名のデフォルト値を受け入れます。これは、作成しているランタイム環境の名前です。

14. **[スタックの作成]** をクリックします。

スタックの作成には数分かかります。スタックの作成を必ず監視し、発生する可能性のある問題に対処してください。CloudFormation スタックのトラブルシューティングの詳細については、AWS のマニュアルを参照してください。

スタックが正常に作成されると、EC2 インスタンスのステータスが CREATE_IN_PROGRESS から CREATE_COMPLETE に変わります。

15. Informatica Intelligent Cloud Services の **【環境設定】** ページで、**【完了】** をクリックします。

IICS でランタイム環境が作成され、**【ランタイム環境】** ページに表示されます。

ヒント: 保留中の Secure Agent の進行状況を確認するには、**【ランタイム環境】** ページで **【Cloud Secure Agent の管理】** をクリックします。統計がページの上部に表示されます。

Secure Agent サービスが起動するまでに数分かかります。Secure Agent を使用する準備が整うと、ステータスが **【環境設定を保留中】** から **【稼働中】** に変わります。更新されたステータスを表示するには、ページの更新が必要になる場合があります。

Google Cloud のインストールの使用

Secure Agent インストーラは、設定ページで入力したいいくつかのプロパティに基づいて、Google Cloud 上にランタイム環境を作成します。

注: Google Cloud のサブスクリプションに、リソースをデプロイする権限が含まれている必要があります。

1. **【Administrator】** で、**【ランタイム環境】** を選択します。
2. **【ランタイム環境】** ページで、**【Cloud Secure Agent の管理】** をクリックします。
3. **【Google Cloud プラットフォーム】** を選択します。
4. **【次へ】** をクリックします。
5. 使用する Google アカウントを選択します。
6. 以下のプロパティを入力します。

プロパティ	説明
プロジェクト	プロジェクトにより、Informatica Intelligent Cloud Services が Google サービスと対話する方法と、使用するリソースを定義します。ドロップダウンリストから Google Cloud プロジェクトを選択します。 注: プロジェクトがない場合は、インストールウィザードを終了し、Google Cloud でプロジェクトを作成します。Informatica Intelligent Cloud Services 内からプロジェクトを作成することはできません。
Secure Agent 名	Secure Agent の名前を入力します。名前は、次のルールに準拠している必要があります。 <ul style="list-style-type: none">- 名前は最大 43 文字で、文字、数字、ハイフンの組み合わせを使用できます。- 最初の文字は小文字にする必要があります。- 最後の文字をハイフンにすることはできません。- すべての文字は小文字にする必要があります。 デフォルトでは、ランタイム環境はエージェントと同じ名前になります。
リージョン	Secure Agent をデプロイするリージョンを選択します。組織と顧客に対する適切なリージョンを選択してください。
マシンタイプ	仮想マシンのマシンタイプを選択します。Google のマシンタイプに慣れていない場合は、少なくとも 4 コア、16GB のメモリを搭載したマシンをサイズを使用してください。

プロパティ	説明
仮想ネットワーク	Google サブスクリプションに基づいて既存の仮想ネットワークを選択するか、新しい仮想ネットワークを作成するかを指定します。 仮想ネットワークは、ハードウェアとソフトウェアを使用して物理ネットワークをエミュレートします。
仮想ネットワーク名	既存の仮想ネットワークを選択するか、新しい仮想ネットワークの名前を入力します。
サブネット	使用するサブネットを選択するか、新しいサブネットの名前を入力します。
サブネットアドレス	すべてのリソースを含むサブネットアドレスを選択するか、新しいサブネットアドレスを入力します。 サブネットのアドレッシングにより、複数のネットワークで構成されているシステムで同じインターネットアドレスを共有できます。

- Google アカウントでコストが発生することを承認するには、**【この操作により Google Cloud Platform でコストが発生することに同意します】** チェックボックスをオンにします。
- 【作成】** をクリックします。
Informatica Intelligent Cloud Services でランタイム環境が作成され、**【ランタイム環境】** ページに表示されます。

Google Cloud での接続に関する問題のトラブルシューティング

Google Cloud のファイアウォールにより、VM へのアクセスがブロックされる可能性があります。この問題が発生した場合は、VM インスタンスへの RDP および SSH アクセスを許可するファイアウォールルールを追加します。

Google Cloud によってアクセスがブロックされると、次のエラーが発生してランタイム環境は起動に失敗します。

Connection Failed. We are unable to connect to the VM on port 22.

- Google Cloud コンソールで、「**ファイアウォールルール**」ページに移動します。
- 【ファイアウォールルールの作成】** をクリックします。
- 次の設定でファイアウォールルールを作成します。

設定項目	値
名前	ファイアウォールルールの名前を入力します。例: allow-ingress-from-iap(<name>)
トラフィックの方向	受信
一致時のアクション	許可
ターゲット	ネットワーク内のすべてのインスタンス
ソースフィルタ	IP 範囲

設定項目	値
ソース IP 範囲	35.235.240.0/20
プロトコルとポート	TCP を選択し、22,3389 と入力して、RDP および SSH を許可します。

4. **【作成】** をクリックします。

Microsoft Azure でのインストール

の Secure Agent インストーラを使用して、Microsoft Azure にランタイム環境を設定できます。Azure でデータ統合タスクを実行すると、ワークロードと VM サイズに基づいてコストが発生することに注意してください。

注: リソースをデプロイできる権限が割り当てられた Microsoft Azure サブスクリプションが必要です。組織で管理者の同意が有効になっている場合は、アプリの同意の承認について Azure 管理者に問い合わせてください。管理者の同意要求の詳細については、[Microsoft documentation](#) を参照してください。

1. [Administrator] で、**【ランタイム環境】** を選択します。
2. **【ランタイム環境】** ページで、**【Cloud Secure Agent の管理】** をクリックします。
3. **【新しい Cloud Secure Agent】** をクリックします。
4. **【Microsoft Azure】** を選択します。
5. **【次へ】** をクリックします。
6. 使用する Microsoft アカウントを選択します。
7. 以下のプロパティを入力します。

プロパティ	説明
サブスクリプション	<p>Microsoft Azure サブスクリプションを選択します。サブスクリプションには、次のリソースをデプロイするための権限が含まれている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> - ネットワークセキュリティグループ - 仮想ネットワーク (サブネットを含む) - ネットワークインタフェース - パブリック IP アドレス - OS ディスク - 仮想マシン <p>プロンプトが表示されるので、必ず Hyperscalar Azure 統合アプリに権限を付与してください。</p> <p>注: Azure サブスクリプションがない場合は、インストーラを終了し、Microsoft にサインアップします。Informatica Intelligent Cloud Services 内からサインアップすることはできません。</p>
リソースグループ	<p>リソースグループは、ランタイム環境の関連リソースを保持するコンテナです。Informatica Intelligent Cloud Services は、Secure Agent ごとに 1 つのリソースグループを使用して、そのエージェントの VM リソースの管理を簡素化します。</p> <p>通常は新しいリソースグループを作成しますが、空の既存のグループを使用することもできます。</p> <p>ヒント: 各エージェントに属するリソースグループをより簡単に識別するには、Secure Agent と同じ名前または類似した名前を使用します。</p>

プロパティ	説明
リソースグループ名	リソースグループの名前。新しいグループの名前を入力するか、既存のグループを選択します。 既存のリソースグループが空であることを確認してください。空ではない場合は、「API 入力検証に失敗しました」というメッセージが表示されます。
ロケーション	Secure Agent をデプロイするリージョンを選択します。組織と顧客に適した Azure リージョンを選択してください。一部のリソースは特定のリージョンでは使用できない場合もあります。
VM 名	作成する仮想マシン (VM) の名前を入力します。
VM ユーザー名	仮想マシンユーザーとして自身の名前を入力します。
VM パスワード	仮想マシンにアクセスするためのパスワードを入力します。
Secure Agent 名	Secure Agent の名前を入力します。デフォルトでは、ランタイム環境はエージェントと同じ名前になります。 ヒント: 各エージェントに属するリソースグループをより簡単に識別できるように、リソースグループと同じ名前または類似した名前を使用します。
VM サイズ	仮想マシンのサイズを選択します。Azure イメージのサイズ設定に慣れていない場合は、4 コアおよび 16 GB 以上のメモリを備えたサイズを設定してみてください。 Azure の時間料金は VM サイズの影響を受けることに注意してください。
仮想ネットワーク	Microsoft Azure サブスクリプションと場所に基づいて既存の仮想ネットワークを選択するか、新しい仮想ネットワークを作成します。
仮想ネットワーク名	既存の仮想ネットワークを選択するか、新しい仮想ネットワークの名前を入力します。既存の仮想ネットワークを選択すると、新しく作成した VM が既存の VNet に関連付けられます。
仮想ネットワークアドレス	既存の仮想ネットワークアドレスを選択するか、新しいアドレスを入力します。
サブネット名	使用するサブネットを選択するか、新しいサブネットの名前を入力します。 サブネットには、仮想ネットワークにデプロイされているすべての Azure リソースが保持されます。
サブネットアドレス	すべてのリソースを含むサブネットアドレスを選択するか、新しいサブネットアドレスを入力します。 サブネットのアドレッシングにより、複数のネットワークで構成されているシステムで同じインターネットアドレスを共有できます。
CIDR IP アドレス範囲	CIDR IP アドレス範囲を入力します。 CIDR (Classless Inter-Domain Routing) は、IP アドレスを割り当てるための方法です。ネットワークルールで Secure Agent へのリモートアクセスを許可するように設定します。アドレスの“/x”の部分により、サブネットで使用可能な IP アドレスの数が決定されます (例:108.124.81.10/32)。

ヒント: 詳細については、Microsoft のドキュメントの「[Explore Azure Virtual Networks](#)」を参照してください。

8. **【作成】** をクリックします。の管理者でランタイム環境が作成され、**【ランタイム環境】** ページに表示されます。

ヒント: 保留中の Secure Agent の進行状況を確認するには、**【ランタイム環境】** ページで **【Cloud Secure Agent の管理】** をクリックします。統計がページの上部に表示されます。

Windows でのインストール

Windows 上では、Secure Agent が Windows サービスとして実行されます。Secure Agent をインストールする際には、Informatica Cloud Secure Agent Manager もインストールします。

デフォルトでは、Windows を起動すると Secure Agent も起動されます。Secure Agent Manager または Windows サービスを使用して Secure Agent を停止および再起動できます。インストールプログラムの実行に使用するボリュームとは異なるボリュームに Secure Agent をインストールする場合は、Windows サービスから Secure Agent を起動および停止する必要があります。

また、Secure Agent Manager を使用して、Secure Agent のステータスをチェックし、プロキシ情報を設定することもできます。Secure Agent は、BASIC、DIGEST、および NTLMv2 プロキシ認証で動作します。

Secure Agent Manager は、**【スタート】** メニューまたはデスクトップアイコンから起動できます。Secure Agent Manager を閉じると、最小化されて Windows タスクバーの通知領域に表示され、すぐにアクセスできるようにされます。

Secure Agent をインストールする際には、次のタスクを実行します。

1. マシンが最小要件を満たしていることを確認します。
2. Secure Agent インストーラのファイルをダウンロードします。
3. Secure Agent をインストールして登録します。

Windows での Secure Agent の要件

Secure Agent は、インターネット接続が可能であり、Informatica Intelligent Cloud Services にアクセス可能な任意のマシンにインストールすることができます。

Windows で Secure Agent をインストールする前に、次の要件を確認してください。

- Secure Agent マシンが、サポート対象のオペレーティングシステムを使用していること。Secure Agent でサポートされているオペレーティングシステムのリストについては、ナレッジベースの [Product Availability Matrix \(PAM\) for Informatica Intelligent Cloud Services](#) を参照してください。
- Secure Agent マシンに、Microsoft Visual C++ 2015 Redistributable があること。
- Secure Agent マシンに、少なくとも 4 つの CPU コア、16GB の RAM、および 5GB 以上の空きディスク容量があること。
- Secure Agent マシンが、250GB 以上のディスク容量と 5GB 以上の空き容量を持つボリューム、または Secure Agent インストールの 3 倍のサイズのボリュームのうち、大きい方のボリューム上にあること。
- Secure Agent のインストールに使用するアカウントに、フラットのソースまたはターゲットファイルが格納されているすべてのリモートディレクトリに対するアクセス権が付与されていること。
- マシンに他の Secure Agent がインストールされていないこと。マシンに別の Secure Agent がインストールされている場合は、まずそのエージェントをアンインストールしてください。

詳細については、ナレッジベースの記事

「[Minimum requirements and best practices when installing Informatica Cloud Secure Agent](#)」を参照してください。

ファイアウォールの設定

組織で保護ファイアウォールを使用している場合は、Informatica Intelligent Cloud Services のドメイン名または IP アドレス範囲を承認済みのドメイン名または IP アドレスの一覧に含めます。Secure Agent がファイアウォールを介して必要なすべてのタスクを実行できるようにするには、Secure Agent が使用するポートを有効にします。

Secure Agent はインターネットに接続するためにポート 443 (HTTPS) を使用します。トラフィックがポート 443 を通過することを許可するようにファイアウォールを設定してください。

ドメインと IP アドレスの許可リストは、POD (Point of Deployment) によって異なる場合があります。POD は、Informatica Intelligent Cloud Services で任意のサービスを開いたときに表示される URL から特定できません。URL 文字列の最初の数文字が POD を表します。例えば、URL が usw3.dm-us.informaticacloud.com で始まる場合、POD は USW3 です。

Informatica Intelligent Cloud Services ドメインの許可リストとさまざまな POD の IP アドレスについては、ドキュメントポータル[の「Pod Availability and Networking」](#)を参照するか、管理者の **[ランタイム環境]** ページの上部にあるリンクをクリックしてください。

Windows での Secure Agent の権限の設定

Secure Agent には、ソースとターゲットの間でデータを転送するために特定の権限が必要です。

Windows に Secure Agent をインストールする場合、その Secure Agent はローカル管理者グループの一部になっている必要があります。

Windows 設定の構成

Windows で Secure Agent を使用する前に、プロキシ設定と Windows Secure Agent サービスログインを設定します。

プロキシ設定は、Secure Agent Manager で設定できます。Windows で Windows Secure Agent サービスのログインを設定します。

注: Informatica Cloud Data ウィザードで Secure Agent を使用する場合、Secure Agent に対してプロキシ設定または Windows サービスログインを設定する必要はありません。

Windows での Secure Agent のダウンロードおよびインストール

Windows マシンに Secure Agent をインストールするには、Secure Agent インストールプログラムをダウンロードして実行してから、エージェントを登録する必要があります。

Secure Agent の登録にはインストールトークンが必要です。インストールトークンを取得するには、エージェントのダウンロード時にトークンをコピーするか、または管理者で **[インストールトークンの生成]** オプションを使用します。トークンは 24 時間後に有効期限が切れます。

Secure Agent をダウンロードしてインストールする前に、そのマシンに他の Secure Agent がインストールされていないことを確認します。他の Secure Agent が存在する場合は、その Secure Agent をアンインストールする必要があります。

ヒント: Secure Agent インストールプログラムのチェックサムを確認するには、エージェントの REST API バージョン 2 リソースを使用します。エージェントリソースの詳細は、『[REST API リファレンス](#)』を参照してください。

1. 管理者を開いて **[ランタイム環境]** を選択します。
2. **[ランタイム環境]** ページで、**[Secure Agent のダウンロード]** をクリックします。

3. Windows 64 ビットオペレーティングシステムプラットフォームを選択し、インストールトークンをコピーしてから **【ダウンロード】** をクリックします。

インストールプログラムがご使用のマシンにダウンロードされます。このインストールプログラムの名前は agent64_install_ng_ext.<Agent Core バージョン>.exe です。

4. 管理者としてインストールプログラムを実行します。
 - a. Secure Agent インストールディレクトリを指定し、**【次へ】** をクリックします。
 - b. **【インストール】** をクリックしてエージェントをインストールします。

【Cloud Secure Agent】 ダイアログボックスが開き、次の図に示すようにエージェントを登録するように求めるプロンプトが表示されます。

5. エージェントのダウンロード時にインストールトークンをコピーしなかった場合は、管理者の **【ランタイム環境】** ページで **【インストールトークンの生成】** をクリックし、トークンをコピーします。
6. Secure Agent Manager で、次の情報を入力し、**【登録】** をクリックします。

オプション	説明
ユーザー名	Informatica Intelligent Cloud Services へのアクセスに使用するユーザー名。
インストールトークン	コピーしたトークン。

Secure Agent Manager が Secure Agent のステータスを表示します。すべてのサービスが起動するまで 1 分かかります。

7. お客様の組織で送信プロキシサーバーを使用してインターネットに接続している場合は、プロキシサーバー情報を入力します。

- Secure Agent Manager を閉じます。

Secure Agent Manager は、最小化されてタスクバーに表示され、停止されるまでサービスとして実行し続けます。

Windows でのプロキシ設定の構成

組織で送信プロキシサーバーを使用してインターネットに接続する場合、Secure Agent は、そのプロキシサーバー経由で Informatica Intelligent Cloud Services に接続します。Secure Agent のインストーラにより、ブラウザで設定されている設定項目に基づいて Secure Agent のプロキシサーバー設定が設定されます。プロキシサーバーの設定は、Secure Agent Manager から変更できます。

正しいプロキシ設定については、ネットワーク管理者にお問い合わせください。

注: プロキシ設定ファイルを手動で更新する方法でプロキシの詳細を更新しないでください。そうすると問題が起こる恐れがあります。必ず Secure Agent Manager を使用してください。

- Secure Agent Manager で、**[プロキシ]** をクリックします。
- プロキシサーバーの設定値を入力するには、**[プロキシサーバーを使用]** をクリックします。
- 次の情報を入力します。

フィールド	説明
プロキシホスト	必須。Secure Agent が使用する送信プロキシサーバーのホスト名。
プロキシポート	必須。送信プロキシサーバーのポート番号。
ユーザー名	送信プロキシサーバーに接続するユーザー名。
パスワード	送信プロキシサーバーに接続するためのパスワード。

- [OK]** をクリックします。

Secure Agent Manager によって Secure Agent が再起動され、設定が適用されます。

Windows Secure Agent サービスのログインの設定

Windows では、Secure Agent サービスのネットワークログインを設定します。Secure Agent は、ログインに関連付けられている特権と権限によってネットワークにアクセスできます。

Secure Agent がディレクトリにアクセスしてタスクを設定および実行できるように、Secure Agent マシンのログインを設定します。接続を設定する、タスクを設定する、およびフラットファイルまたは FTP/SFTP 接続タイプを使用するタスクを実行する場合、Secure Agent には、関連するディレクトリでの読み取りおよび書き込み権限が必要です。

例えば、ディレクトリを参照してフラットファイルまたは FTP/SFTP 接続を設定するには、Secure Agent のログインでそのディレクトリへのアクセス権限を必要とする場合があります。Secure Agent のログインに適切な権限が付与されていないと、Informatica Intelligent Cloud Services では、**[ディレクトリの参照]** ダイアログボックスにディレクトリを表示できません。

- Windows の **[管理ツール]** から、**[サービス]** ウィンドウに移動します。
- [サービス]** ウィンドウで、Informatica Cloud Secure Agent サービスを右クリックし、**[プロパティ]** を選択します。
- [プロパティ]** ダイアログボックスで、**[ログオン]** タブをクリックします。

4. ログインを設定するには、**[このアカウント]** を選択します。
5. アカウントとパスワードを入力します。
ドメインで定義されているネットワークセキュリティに応じて、必須の特権と権限が付与されているアカウントを使用します。デフォルトのアカウント形式は、<ドメイン名>\<ユーザー名>です。
6. **[OK]** をクリックします。
7. **[サービス]** ウィンドウで、Secure Agent サービスを再起動して変更を有効にします。

Linux でのインストール

Linux の場合、Secure Agent はプロセスとして実行されます。シェルコマンドラインを使用して、Secure Agent をインストール、登録、起動、停止、およびアンインストールすることができます。

また、シェルコマンドラインを使用して Secure Agent のステータスをチェックすることもできます。

Secure Agent をインストールするときには、次のタスクを実行します。

1. マシンが最小要件を満たしていることを確認します。
2. Secure Agent インストーラのファイルをダウンロードします。
3. Secure Agent をインストールして登録します。

次のガイドラインを考慮します。

- 特定のユーザープロファイルを作成して、Secure Agent インストールディレクトリから、すべてのフォルダへのフルアクセス権を持つ Secure Agent をインストールします。root ユーザーとして Secure Agent をインストールしないでください。
- 同じユーザーアカウントで同じマシンに複数の Secure Agent をインストールすることはできません。異なるユーザーアカウントで複数のエージェントが存在する場合があります。
- Informatica ドメイン内のどのノードにも Secure Agent をインストールしないでください。

Linux での Secure Agent の要件

Secure Agent は、インターネット接続が可能であり、Informatica Intelligent Cloud Services にアクセス可能な任意のマシンにインストールすることができます。Linux で Secure Agent をインストールする前に、システム要件を確認してください。

Linux で Secure Agent をインストールする前に、次の要件を確認してください。

- マシンが、サポート対象のオペレーティングシステムを使用していることを確認します。Secure Agent でサポートされているオペレーティングシステムのリストについては、ナレッジベースの [Product Availability Matrix \(PAM\) for Informatica Intelligent Cloud Services](#) を参照してください。
- マシンに 11GB 以上の空きディスク容量があることを確認します。
- libidn.x86_64 パッケージがインストールされていることを確認します。
パッケージがない場合は、次のコマンドを使用してインストールします: `sudo yum install libidn.x86_64`
注: パッケージをインストールするコマンドは、Linux ディストリビューションによって異なる場合があります。
- libidn.so.*ライブラリがインストールされていることを確認します。

ライブラリが存在しない場合は、次のコマンドを使用してインストールします。

- 64 ビットシステムの場合: `cd /usr/lib/x86_64-linux-gnu`

- 32 ビットシステムの場合: `cd /usr/lib/i386-linux-gnu`

ライブラリをインストールした後、次のコマンドを使用してシンボリックリンクを作成します。

```
sudo ln -s libidn.so.12 libidn.so.11
```

- Secure Agent を RHEL 9 にインストールする場合は、libnsl ライブラリがインストールされていることを確認します。

ライブラリがない場合は、次のコマンドを使用してインストールします: `sudo yum install libnsl`

注: パッケージをインストールするコマンドは、Linux ディストリビューションによって異なる場合があります。

libnsl が存在するかどうかを確認するには、次のいずれかのコマンドを使用します: `ldconfig -p | grep libnsl` または `which libnsl`

- Secure Agent のインストールに使用するアカウントに、フラットのソースまたはターゲットファイルが格納されているすべてのリモートディレクトリに対するアクセス権が付与されている必要があります。
- PowerCenter を使用する場合は、PowerCenter のインストールに使用したアカウントとは別のユーザーアカウントを使用して、Secure Agent をインストールします。
Informatica Intelligent Cloud Services と PowerCenter は、いくつかの共通の環境変数を使用します。
Informatica Intelligent Cloud Services に対して環境変数が正しく設定されていない場合、ジョブは実行時に失敗する可能性があります。

詳細については、ナレッジベースの記事

「[Minimum requirements and best practices when installing Informatica Cloud Secure Agent](#)」を参照してください。

ファイアウォールの設定

組織で保護ファイアウォールを使用している場合は、Informatica Intelligent Cloud Services のドメイン名または IP アドレス範囲を承認済みのドメイン名または IP アドレスの一覧に含めます。Secure Agent がファイアウォールを介して必要なすべてのタスクを実行できるようにするには、Secure Agent が使用するポートを有効にします。

Secure Agent はインターネットに接続するためにポート 443 (HTTPS) を使用します。トラフィックがポート 443 を通過することを許可するようにファイアウォールを設定してください。

ドメインと IP アドレスの許可リストは、POD (Point of Deployment) によって異なる場合があります。POD は、Informatica Intelligent Cloud Services で任意のサービスを開いたときに表示される URL から特定できません。URL 文字列の最初の数文字が POD を表します。例えば、URL が `usw3.dm-us.informaticacloud.com` で始まる場合、POD は USW3 です。

Informatica Intelligent Cloud Services ドメインの許可リストとさまざまな POD の IP アドレスについては、ドキュメントポータル「[Pod Availability and Networking](#)」を参照するか、管理者の [ランタイム環境] ページの上部にあるリンクをクリックしてください。

Linux での Secure Agent の権限の設定

Secure Agent には、ソースとターゲットの間でデータを転送するために特定の権限が必要です。

Linux に Secure Agent をインストールする場合、その Secure Agent には、インストールディレクトリに対する読み取り/書き込み/実行権限が必要です。

Linux での Secure Agent のダウンロードおよびインストール

Linux マシンに Secure Agent をインストールするには、Secure Agent インストールプログラムをダウンロードして実行してから、エージェントを登録する必要があります。

Secure Agent の登録にはインストールトークンが必要です。インストールトークンを取得するには、エージェントのダウンロード時にトークンをコピーするか、または管理者で **【インストールトークンの生成】** オプションを使用します。トークンは 24 時間後に有効期限が切れます。

エージェントを登録すると、デフォルトで独自の Secure Agent グループに追加されます。エージェントは別の Secure Agent グループに追加することもできます。

Secure Agent をダウンロードしてインストールする前に、同じ Linux ユーザーアカウントを使用してそのマシンに他の Secure Agent がインストールされていないことを確認します。他のエージェントが存在する場合は、アンインストールする必要があります。

ヒント: Secure Agent インストールプログラムのチェックサムを確認するには、エージェントの REST API バージョン 2 リソースを使用します。エージェントリソースの詳細は、『*REST API リファレンス*』を参照してください。

1. 管理者を開いて **【ランタイム環境】** を選択します。
2. **【ランタイム環境】** ページで、**【Secure Agent のダウンロード】** をクリックします。
3. Linux 64 ビットオペレーティングシステムプラットフォームを選択し、インストールトークンをコピーしてから **【ダウンロード】** をクリックします。

インストールプログラムがご使用のマシンにダウンロードされます。このインストールプログラムの名前は agent64_install_ng_ext.<Agent Core バージョン>.bin です。

4. Secure Agent を実行するマシン上のディレクトリにインストールプログラムを保存します。

注: ファイルパスにスペースが含まれていると、インストールに失敗します。

5. シェルコマンドラインから、インストールプログラムをダウンロードしたディレクトリに移動し、次のコマンドを入力します。

```
。 /agent64_install_ng_ext.bin -i console
```

6. インストーラが終了したら、次のディレクトリに移動します。

```
<Secure Agent のインストールディレクトリ>/apps/agentcore
```

7. Secure Agent を起動するには、次のコマンドを入力します。

```
。 /infaagent startup
```

Secure Agent Manager が起動します。Informatica Intelligent Cloud Services へのアクセスに使用するユーザー名を使用してエージェントを登録する必要があります。また、インストールトークンを指定する必要もあります。

8. エージェントのダウンロード時にインストールトークンをコピーしなかった場合は、管理者の **【ランタイム環境】** ページで **【インストールトークンの生成】** をクリックし、トークンをコピーします。
9. エージェントを登録するには、<Secure Agent のインストールディレクトリ>/apps/agentcore ディレクトリで、Informatica Intelligent Cloud Services のユーザー名とコピーしたトークンを使用して、次のいずれかのコマンドを入力します。

- エージェントを独自の Secure Agent グループに追加するには、次のコマンドを使用します。

```
./consoleAgentManager.sh configureToken <user name> <install token>
```

- エージェントを既存の Secure Agent グループに追加するには、次のコマンドを使用します。

```
./consoleAgentManager.sh configureTokenWithRuntime <user name> <install token> <Secure Agent group name>
```

注: 存在しない Secure Agent グループ名がコマンドに含まれている場合、Secure Agent はグループに割り当てられません。有効な Secure Agent グループ名を使用するようにしてください。

以下の表にコマンドのオプションの一覧を示します。

オプション	説明
ユーザー名	必須。Secure Agent をインストールするユーザーの Informatica Intelligent Cloud Services ユーザー名。
インストールトークン	必須。コピーしたインストールトークン。
Secure Agent グループ名	オプション。既存の Secure Agent グループにエージェントを追加する場合、代わりに含めます。このオプションがコマンドに含まれていない場合、エージェントは独自の Secure Agent グループに追加されます。

Secure Agent の登録ステータスは、次のコマンドを使用して確認できます。

。 /consoleAgentManager.sh isConfigured

Linux でのプロキシ設定

組織で送信プロキシサーバーを使用してインターネットに接続する場合、Secure Agent は、そのプロキシサーバー経由で Informatica Intelligent Cloud Services に接続します。Secure Agent のインストーラにより、ブラウザで設定されている設定項目に基づいて Secure Agent のプロキシサーバー設定が設定されます。プロキシサーバーの設定の更新は、コマンドラインおよび管理者サービスから行います。

1. コマンド プロンプトを開き、次のディレクトリに移動します。

```
<Secure Agent installation directory>/apps/agentcore
```

2. proxy.ini ファイルを更新するシェルコマンドを使用します。ネットワーク管理者に問い合わせ、プロキシの設定項目を決めてください。

次のコマンドを使用して、proxy.ini ファイルを更新します。

```
./consoleAgentManager.sh configureProxy <proxy host> <proxy port> <proxy user name> <proxy password>
```

3. Informatica Intelligent Cloud Services にログインします。
4. [管理者] サービスを開いて **【ランタイム環境】** を選択します。
5. プロキシサーバーを設定する Secure Agent を選択します。
6. ページの右上隅にある **【編集】** をクリックします。
7. **【システム構成の詳細】** セクションで、**【サービス】** のプロパティを **【データ統合サーバー】** に設定し、**【タイプ】** のプロパティを **【DTM】** に設定します。
8. 使用可能な **【JVMOption】** フィールドに必要なパラメータを追加し、各パラメータに適切な値を指定します。

以下の表に、追加可能なパラメータを示します。

パラメータ	説明
-Dhttp.proxyHost=	送信 HTTP プロキシサーバーのホスト名。
-Dhttp.proxyPort=	送信 HTTP プロキシサーバーのポート番号。
-Dhttp.proxyUser=	HTTP プロキシサーバの認証ユーザ名。このオプションは、プロキシサーバーが認証を要求した場合に必要です。
-Dhttp.proxyPassword=	認証されたユーザのパスワード。本オプションは、プロキシサーバが認証を要求した場合に必要となります。
-Dhttps.proxyHost=	送信 HTTPS プロキシサーバーのホスト名。
-Dhttps.proxyPort=	送信 HTTPS プロキシサーバーのポート番号。
-Dhttps.proxyUser=	HTTPS プロキシサーバーの認証ユーザー名。このオプションは、プロキシサーバーが認証を要求した場合に必要です。
-Dhttps.proxyPassword=	認証されたユーザのパスワード。本オプションは、プロキシサーバが認証を要求した場合に必要となります。

HTTP の例。

```
JVMOption1=-Dhttp.proxyHost=<proxy_server_hostname>  
JVMOption2=-Dhttp.proxyPort=8081  
JVMOption3=-Dhttp.proxyUser=<proxy_user_name>  
JVMOption4=-Dhttp.proxyPassword=<proxy_password>
```

HTTPS の例。

```
JVMOption1=-Dhttps.proxyHost=<proxy_server_hostname>  
JVMOption2=-Dhttps.proxyPort=8081  
JVMOption3=-Dhttps.proxyUser=<proxy_user_name>  
JVMOption4=-Dhttps.proxyPassword=<proxy_password>
```

9. **【保存】** をクリックします。

Secure Agent が再起動して設定が適用されます。

第 4 章

接続設定

接続を作成すると、データ統合組織で使用できるようになります。

ほとんどの接続タイプで、接続を設定する際には、接続のランタイム環境を指定します。ランタイム環境には、接続の設定時に稼働中のエージェントが含まれている必要があります。その他の接続タイプの場合は、タスクの設定時にランタイム環境を指定します。

ここでは、接続の設定に関する一般的な情報について説明します。接続およびフラットファイルと FTP 接続の設定に関する詳細については、「[接続](#)」を参照してください。その他の接続の種類の詳細については、ヘルプの「[コネクタ](#)」セクションのデータ統合コネクタのトピックを参照してください。

接続の設定

接続を構成するには、**[接続]** ページ、タスクまたはタスクフローを構成するときにウィザードで、またはマッピングを構成するときにマッピングデザイナを実行します。

[接続] ページにアクセスするには、管理者で **[接続]** を選択します。

1. 次の接続の詳細を設定します。

接続の詳細	説明
接続名	接続の名前。 各接続名は組織内で一意である必要があります。接続名には、英数字、スペース、および次の特殊文字を含めることができます。_ . + - 最大長は 100 文字です。接続名では大文字と小文字は区別されません。
説明	接続の説明。 最大長は 255 文字です。
タイプ	Salesforce や Oracle などの接続のタイプ。

2. 接続固有のプロパティを設定します。例えば、フラットファイル接続タイプの場合は、接続で使用するランタイム環境、フラットファイルの保存先ディレクトリ、フラットファイルの日付フィールドの形式、フ

ラットファイルをホストするシステムのコードページを入力します。次の画像は、フラットファイル接続のプロパティフィールドを示しています。

The screenshot shows the 'New Connection' dialog box. At the top, there are 'Save' and 'Test Connection' buttons. The dialog is titled 'New Connection'. Under 'Connection Details', the 'Connection Name' is 'SalesAccounts-FlatFile', 'Description' is empty, and 'Type' is 'Flat File'. Under 'Flat File Connection Properties', 'Runtime Environment' is 'CAB123456', 'Directory' is 'C:\OurCompany\Sales' with a 'Browse...' button, 'Date Format' is 'MM/dd/yyyy HH:mm:ss', and 'Code Page' is 'UTF-8'.

3. 接続をテストするには、**【テスト】** をクリックします。次の画像に示すとおり、テスト結果がページに表示されます。

The screenshot shows the 'SalesAccounts-FlatFile' dialog box. At the top, there are 'Save' and 'Test Connection' buttons. A green checkmark and the message 'The test for this connection was successful.' are displayed at the top. The dialog is titled 'SalesAccounts-FlatFile'. Under 'Connection Details', the 'Connection Name' is 'SalesAccounts-FlatFile', 'Description' is empty, and 'Type' is 'Flat File'. Under 'Flat File Connection Properties', 'Runtime Environment' is 'CAB123456', 'Directory' is 'C:\OurCompany\Sales' with a 'Browse...' button, 'Date Format' is 'MM/dd/yyyy HH:mm:ss', and 'Code Page' is 'UTF-8'.

データベース接続に失敗する場合は、データベース管理者にお問い合わせください。

4. **【保存】** をクリックして接続を保存します。

オブジェクト検索と選択

データ統合のマッピングまたはタスクで接続を選択すると、使用する1つのオブジェクトまたは複数のオブジェクトを検索できます。

オブジェクトを検索するとき、**【オブジェクトを選択】** ダイアログボックスに、接続に使用できるオブジェクトが表示されます。いずれかのオブジェクトを選択するか、検索文字列を入力できます。検索を開始するには、**【検索】** をクリックするか、**Enter** を押します。

注:一部の接続タイプでは、オブジェクトを表示して選択する前に、**[パッケージ]** ペインでオブジェクトに関連付けられたスキーマを選択する必要があります。使用するスキーマを検索できます。

同期とマッピングタスクの場合、接続の応答が遅いときにオブジェクト検索を使用します。

検索文字列を入力するときは、以下のガイドラインに従ってください。

- ワイルドカード文字にはアスタリスク (*) を使用します。
- 完全一致検索を実行するには引用符 (") を使用します。完全一致検索では大文字と小文字が区別されます。
- 接続タイプに基づいて次の検索パラメータを使用できます。

接続タイプ	検索パラメータ
データベース	名前
CDC	名前
フラットファイル	名前

第 5 章

プロジェクトの設定

[エクスプローラ] ページでプロジェクトとプロジェクトフォルダを作成し、アセットを整理します。プロジェクトに必要なランタイム環境と接続を設定したら、プロジェクトのアセットを作成できます。

次の文字は使用できません。

? ' | { } " ^ & [] / \

これらの文字を、プロジェクト、アセット、タグ名に使用しないでください。

プロジェクトとプロジェクトフォルダの作成

プロジェクトで使用されるアセットを整理するために使用できる複数のフォルダを含めることができます。**[エクスプローラ]** ページを使用してプロジェクトを作成します。

プロジェクトを作成するには、**[エクスプローラ]** ページに移動し、プロジェクト別およびフォルダ別のエクスプローラを選択して、**[新規プロジェクト]** をクリックします。



プロジェクトフォルダを作成するには、**[エクスプローラ]** ページに移動してプロジェクトを開き、**[新規フォルダ]** をクリックします。



プロジェクトには、1つのレベルのフォルダを作成できます。フォルダ内にフォルダを作成することはできません。

プロジェクトの操作の詳細については、「アセットの管理」を参照してください。

アセットの作成

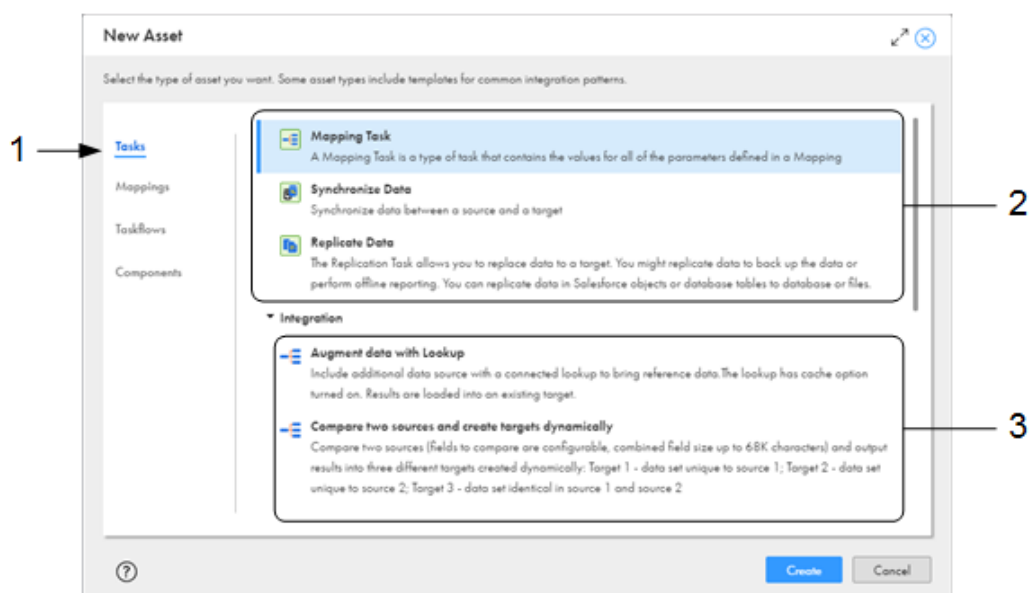
統合アセットを作成し、プロジェクトに割り当てます。

カスタムアセットを作成したり、テンプレートからアセットを作成したりできます。

カスタムアセットを作成するには、**【新規】** をクリックし、アセットタイプを選択します。特定のタイプのアセットを作成する具体的な方法については、マッピングまたはタスクの適切なアセットタイプを参照してください。

テンプレートからアセットを作成するには、**【新規】** をクリックし、アセットタイプを選択して、適切なテンプレートを選択します。マッピングタスクテンプレートとマッピングテンプレートは、マッピングタイプに対応する見出しの下に一覧表示されます。

次の図は、アセットを作成するときに表示されるダイアログボックスを示しています。



1. 作成するアセットのタイプを選択します。このイメージでは、[Tasks] が選択されています。
2. これらのオプションのいずれかを選択して、カスタムアセットを作成します。左側で [Tasks] が選択されているため、この領域には作成できるタスクが一覧表示されます。
3. 見出しの下いずれかのオプションを選択して、テンプレートからタスクを作成します。このイメージでは、[Integration] の見出しが展開されているので、一覧表示されているテンプレートはデータ統合マッピングに基づいています。

ヒント: 組織で理解できるような標準的な命名規則を使用する事をお勧めします。以下はその例です。

- すべてのアセット名の先頭にアセットタイプの略語を付けます。例えば、マッピング名の場合は m_、マッピングタスクの場合は mt_ を先頭に付けます。
- マッピング内では、すべてのソーストランスフォーメーション名が src_ で始まり、すべてのパラメータ名が p_ で始まるようにするなどができます。
- フィルタ名を flt_ から始めるなど、オブジェクトの目的を説明する名前も使用できます。

標準的な命名規則は、大規模で複雑なマッピングを使用する場合に特に役立ちます。これにより、各オブジェクトのタイプおよび目的を簡単に識別できます。

アセットの操作の詳細については、「アセットの管理」を参照してください。

第 6 章

ソース管理の有効化

Informatica Intelligent Cloud Services 組織に、ソース管理を使用するライセンスがある場合は、Informatica Intelligent Cloud Services でソース管理リポジトリのユーザー資格情報を指定します。

組織でソース管理を使用するには、組織の管理者が、Informatica Intelligent Cloud Services 組織と GitHub、Azure DevOps、または Bitbucket ソース管理リポジトリとの間のリンクを事前に設定する必要があります。

ソース管理リポジトリに対する読み取り/書き込みアクセス権が組織にある場合は、プロジェクトやアセットをリポジトリに追加できます。オブジェクトをチェックアウトまたは変更してリポジトリにチェックインするたびに、ソース管理システムによってオブジェクトの新しいバージョンが作成されます。

ソース管理リポジトリに対する組織のアクセス権が読み取り専用アクセス権の場合、プロジェクトやアセットのバージョンを取り出すことはできますが、新しいオブジェクトや更新したオブジェクトをリポジトリに追加することはできません。

ソース管理に関する詳細については、「[アセットの管理](#)」を参照してください。

リポジトリアクセスの設定

ソース管理されているオブジェクトを操作するには、Informatica Intelligent Cloud Services でリポジトリ資格情報を指定します。

資格情報には、使用するリポジトリサービスに応じて、個人用アクセストークンまたはアプリパスワードを含めることができます。

管理者が組織のリポジトリを OAuth アクセス用に設定している場合は、個人用アクセストークンまたはアプリパスワードを提供する代わりに OAuth アクセスを有効にすることができます。

個人用アクセストークンとアプリパスワードは、プライベートリポジトリを完全に制御できるように設定する必要があります。個人用アクセストークンの生成については、GitHub または Azure DevOps Git のヘルプを参照してください。アプリパスワードの生成については、Bitbucket のヘルプを参照してください。

リポジトリへのアクセスを設定するには、次の手順を実行します。

1. ツールバーの **【ユーザー】** アイコンをクリックし、**【設定】** を選択します。
2. **【ソースコード管理資格情報】** セクションで、次のいずれかのタスクを実行します。
 - リポジトリの資格情報を入力します。
 - リポジトリへの OAuth アクセスを有効にします。
アクセスを承認していない場合は、GitHub と Azure DevOps の Git リポジトリに Git アクセスアプリが表示されます。Informatica Intelligent Cloud Services へのアクセスを承認する場合に選択します。
3. **【保存】** をクリックします。

第 7 章

ユーザープロファイルの編集

ユーザープロファイルには Informatica Intelligent Cloud Services のユーザーアカウントの詳細が含まれません。

プロフィール内の次の情報を更新できます。

- 姓名
- 役職
- 電子メールアドレス
- 電話番号
- タイムゾーン（[すべてのジョブ]、[実行中のジョブ]、[マイジョブ]、[インポート/エクスポートログ]、[メインインポート/エクスポートログ] ページのジョブ実行のタイムスタンプで使用）
- パスワード
- セキュリティの質問および回答

注: SAML を使用して Informatica Intelligent Cloud Services にサインオンし、組織の管理者が管理者の **[SAML セットアップ]** ページで SAML グループとロールのマッピングを有効にしている場合、更新できるのはタイムゾーンのみです。その他の属性は、Informatica Intelligent Cloud Services にログインするたびにエンタープライズディレクトリから直接更新されます。

1. Informatica Intelligent Cloud Services ウィンドウ右上隅にある **[ユーザー]** アイコンをクリックして、**[プロフィール]** を選択します。
2. **[プロフィール]** ページで、氏名、役職、電話番号、タイムゾーンなどの個人情報を追加または編集します。
3. 電子メールアドレスを更新するには、**[電子メールを更新]** をクリックします。
Informatica Intelligent Cloud Services から新しい電子メールアドレス宛てに確認メールが送信されます。電子メールには、24 時間有効なリンクが含まれています。電子メール内のリンクをクリックすると、新しいアドレスが確認され、プロフィールに表示されます。リンクの有効期限が切れた場合は、確認メールを再送信できます。
4. 必要に応じて、パスワードまたはセキュリティの質問を変更します。
5. **[保存]** をクリックします。

第 8 章

ユーザー設定の編集

ユーザー設定で、受信する通知のタイプの設定、およびソースコードの資格情報の設定を行います。

ユーザー設定にアクセスするには、ツールバーの **[ユーザー]** アイコンをクリックしてから、**[設定]** を選択します。

ユーザー設定ページには、次のようなセクションがあります。

通知の設定

[通知の設定] セクションには、受信する資格のある通知のカテゴリが一覧表示されます。イベントが発生するたびに電子メールで受信する通知、サマリメールで受信する通知、およびサマリメールを受信する頻度を設定することができます。

ソースコード管理資格情報

[ソースコード管理資格情報] セクションでは、リポジトリの資格情報を設定して、ソース管理オブジェクトを操作できます。

第 9 章

組織へのユーザーの招待

適切なロールが割り当てられている場合は、ランタイム環境またはプライマリクラウドデータウェアハウスの設定時にユーザーを組織に招待できます。ユーザーを組織に招待して、ランタイム環境の設定やクラウドデータウェアハウスへの接続を手伝ってもらうことができますようにします。

組織に参加するようにユーザーを招待するには、**【友人や同僚を招待して手伝ってもらう】** をクリックします。ユーザーの招待を行うには、管理者ロールが割り当てられているか、デザイナーロールと、「読み取りロール」および「ユーザーの作成」管理者アセット特権を持つカスタムロールが割り当てられている必要があります。招待するユーザーには、管理者ロールまたはデザイナーロールを割り当てる必要があります。

【友人や同僚を招待して手伝ってもらう】 オプションが表示されない場合、またはユーザーに別のロールを割り当てる場合は、管理者の **【ユーザー】** ページでユーザーを追加します。詳細については、管理者のヘルプの「ユーザー管理」を参照してください。

1. **【友人や同僚に手伝ってもらう】** をクリックします。
2. 招待するユーザーの名、姓、電子メールアドレス、ユーザー名、およびロールを入力します。
ユーザー名は、組織内で一意である必要があります。ユーザーを招待した後にユーザー名を変更することはできません。
3. **【OK】** をクリックします。
招待したユーザーには、組織に参加するためのリンクが記載されたメールが送信されます。

第 10 章

プライマリクラウドデータウェアハウスのセットアップ

プライマリクラウドデータウェアハウスは、通常はデータをロードする場所を接続できます。この設定を行うと、作成した SQL ELT モードのマッピングが、このターゲットにデータをロードするように自動的に設定されます。必要に応じて、ターゲットを引き続き変更することができます。

プライマリクラウドデータウェアハウスの接続先は、Amazon Redshift、Google BigQuery V2、Databricks、または Snowflake のいずれかのタイプのデータウェアハウスに対してのみ設定することができます。

選択したクラウドデータウェアハウスは、現在ログインしている組織に適用されます。複数の組織にアクセスできる場合は、組織とサブ組織ごとに異なるプライマリクラウドデータウェアハウスを設定できます。

セットアップ手順は、プライマリクラウドデータウェアハウスの設定が完了しているかどうかに応じて異なります。設定が完了している場合は、その設定を変更または選択解除することができます。

注: この機能は、データ取り込みおよびレプリケーションタスクではサポートされていません。

プライマリクラウドデータウェアハウスの設定

【ホーム】 ページからプライマリクラウドデータウェアハウスの設定を行います。

1. **【ホーム】** ページの **【クラウドデータウェアハウスをプライマリの接続先として使用しますか?】** パネルで、**【はい、開始します】** をクリックします。
2. **【接続先】** ページで、クラウドデータウェアハウスのタイプ（Snowflake Data Cloud や Databricks Delta など）を選択し、**【次へ】** をクリックします。
3. **【接続】** ページで接続を選択するか、**【新規】** をクリックして接続プロパティを入力します。
4. **【接続】** をクリックします。

プライマリクラウドデータウェアハウスの変更または選択解除

プライマリクラウドデータウェアハウスの設定が完了している場合、この設定を変更または選択解除できます。
【ホーム】 ページからプライマリクラウドデータウェアハウスの変更または選択解除を行います。

1. 【ホーム】 ページで、右上隅にあるクラウドデータウェアハウスのタイプをクリックし、**【プライマリクラウドデータウェアハウスの変更】** を選択します。
2. プライマリクラウドデータウェアハウスを変更する場合は、**【プライマリクラウドデータウェアハウスがあります】** を選択します。
3. クラウドデータウェアハウスタイプを変更するには、次の手順を実行します。
 - a. **【タイプ】** の横にある **【変更】** をクリックします。
 - b. **【接続先】** ページで、データウェアハウスのタイプを選択し、**【次へ】** をクリックします。
 - c. **【接続】** ページで接続を選択するか、**【新規】** をクリックして接続プロパティを入力します。
 - d. **【接続】** をクリックします。
4. 接続を変更するには、次の手順を実行します。
 - a. **【接続】** の横にある **【変更】** をクリックします。
 - b. **【接続】** ページで接続を選択するか、**【新規】** をクリックして接続プロパティを入力します。
 - c. **【接続】** をクリックします。
5. プライマリクラウドデータウェアハウスを使用しない場合は、**【プライマリクラウドデータウェアハウスがありません】** を選択し、**【保存】** をクリックします。

第 11 章

別の組織への切り替え

親組織の管理者またはサブ組織の表示権限を持つ親組織のユーザーの場合は、これらの組織間で切り替えることができます。Informatica Intelligent Cloud Services をログアウトして、もう一度ログインする必要はありません。

注: 親組織から下位組織に切り替えると、下位組織で次の操作を実行できなくなります。

- データ転送タスクの作成またはインポート
- 動的マッピングタスクの作成またはインポート
- タスクフローの作成、検証、パブリッシュ、および実行
- タスクフローのエクスポートとインポート

別の組織に切り替えるには:

- ▶ 右上隅の **[組織]** メニューから、表示する組織を選択します。

索引

A

Azure DevOps ユーザー資格情報 [37](#)

B

Bitbucket ユーザー資格情報 [37](#)

C

Cloud アプリケーション統合コミュニティ
URL [5](#)
Cloud 開発者コミュニティ
URL [5](#)

G

GitHub ユーザー資格情報 [37](#)

H

Hosted Agent
説明 [14](#)

I

Informatica Intelligent Cloud Services
Web サイト [5](#)
Informatica グローバルカスタマサポート
連絡先情報 [6](#)
Internet Explorer 11
要求条件 [8](#)

L

Linux
プロキシの設定 [30](#)

P

POD
特定方法 [24, 28](#)

S

Secure Agent
IP アドレス許可リスト [24, 28](#)
Linux での権限 [28](#)

Secure Agent (続く)
Linux での登録 [29](#)
Linux での要件 [27](#)
Linux へのインストール [29](#)
Windows サービスログインの設定 [26](#)
Windows での起動 [23](#)
Windows での権限 [24](#)
Windows での登録 [24](#)
Windows での要件 [23](#)
Windows へのインストール [24](#)
クラウド環境へのインストール [16](#)
ドメイン許可リスト [24, 28](#)
通信ポート [24, 28](#)
Secure Agent Manager
起動 [23](#)

W

Web サイト [5](#)
Windows
プロキシの設定 [26](#)
Windows サービス
Secure Agent ログインの設定 [26](#)

あ

アセット
ソース管理 [37](#)
作成 [36](#)
アップグレード通知 [6](#)

お

オブジェクト検索
タスクウィザード [33](#)

く

クラウドデータウェアハウス
プライマリクラウドデータウェアハウスの接続先の設定 [41](#)
プライマリクラウドデータウェアハウスの選択解除 [42](#)
プライマリクラウドデータウェアハウスの変更 [42](#)

さ

サブ組織
別の組織への切り替え [43](#)

し

システムステータス [6](#)
システム要件 [8](#)

す

ステータス
Informatica Intelligent Cloud Services [6](#)

せ

セキュリティの質問
編集 [38](#)

そ

ソース
タスクウィザードでの検索 [33](#)
ソース管理
リポジトリへのアクセスの設定 [37](#)

た

ターゲット
タスクウィザードでの検索 [33](#)
タイムゾーン
ユーザープロファイルの変更 [38](#)

て

ディレクトリ
アクセスする Secure Agent ログインの設定 [26](#)

は

バージョン管理 [37](#)
パスワード
変更 [38](#)

ふ

ファイアウォール
設定 [24](#), [28](#)
フォルダ
作成 [35](#)
プロキシ設定
Linux での設定 [30](#)
Windows 上での設定 [26](#)
プロジェクト
ソース管理 [37](#)
フォルダの作成 [35](#)
作成 [35](#)
プロファイル
編集 [38](#)

め

メンテナンスの停止 [6](#)

ゆ

ユーザー
招待 [40](#)
追加、編集、および削除 [40](#)
ユーザープロファイル
編集 [38](#)

ら

ランタイム環境
Hosted Agent [14](#)
クラウド環境へのインストール [16](#)
設定 [13](#), [16](#), [19](#), [21](#)

る

ルックアップ
タスクウィザードでの検索 [33](#)